

5「コミュニティカフェ『茶論』」（千葉県柏市）

1. 概要



運営主体	多世代交流型コミュニティ実行委員会		
所在地 (基礎自治体)	千葉県柏市	人口規模*	429,865 人(R4.3 現在)
(活動範囲)	柏市沼南地域	(基礎自治体) (活動範囲) *	52,812 人(R2.10 現在)
活動展開の範囲	千葉県柏市沼南地域		
活動拠点の種類	市所有の空き倉庫（車庫）		
活動開始年	2012（H24）年		
活動概要	<ul style="list-style-type: none"> かつては、田舎に大きな神社と森（「鎮守の森」）があり、みんなが遊んでいる、体験して教えてもらえる環境があった。子どもが少なくなる中、集まってくればなんでも教われるという場所を目指している。 使われていなかった市の倉庫（車庫）を活用し、コミュニティカフェ「茶論」を立ち上げ。ここをベースキャンプに、地域と小・中学校が一緒になって、教室やサークル、コミュニティを作り、大人子ども、全ての世代の交流を図っている。 		
対応する地域課題	地域におけるつながりの希薄化 就労や社会参加の機会がない（乏しい）こと		

*人口出典：柏市 WEB サイト「柏市の地理・人口」https://www.city.kashiwa.lg.jp/databunseki/shiseijoho/about_kashiwa/profile/chirijinko.html

*人口出典（活動範囲）：「第 8 期柏市高齢者いきいきプラン 21」<https://www.city.kashiwa.lg.jp/documents/4683/1souron.pdf>

2. 活動の展開プロセス

■ 地域の背景

- 高柳地区は、昔から農業に従事してきた人と宅地開発で別の地域から移り住んできた人が入り交じっており、地域や学校でも誰でも受け入れるという風土があった。

■ 大学から地域への提案

- 2009（H21）年ごろ、高柳区の役員に対し、まちづくりに詳しい大学教授から交流の場、学びの場として全世代型コミュニティづくりの相談・提案があった。大学から柏市社会福祉協議会に提案があり、実行委員会（運営委員会）の組織につながった。検討して進めることになったものの、なかなか率先して進める人が出てこない状況の中で、現在の代表が手を上げた。

■ 実行委員会の思い

- ・ かつては地域の神社の周りがある森「鎮守の森」に行けば、大人から子どもまでみんなが集っていて、体験して教わることができるという環境があった。しかし、少子化・核家族化が進む中で、祖父母と同居する孫は減ってしまい、子どもに教える大人も少なくなっていた。他人の孫（＝たまご）に教えることで、教わった子どもが今度は教えるという連鎖が生まれるのではないかという考え。かつての鎮守の森のように、集まってくればなんでも教われる場所を作りたいと考えた。

■ 場所の確保

- ・ 活動開始時には地域支援課が地域の活性化に取り組んでおり、大学との繋がりもあったことから高柳地区でテスト的に行うことになった。
- ・ 実行委員会で話し合いを続ける中で高柳児童センターの車庫が使えるのではないかと提案が出てきた。実行委員会が市役所に掛け合った結果、この場所を借りて使うことができるようになった。

■ 活動開始

- ・ 多世代交流型コミュニティ実行委員会では以下の活動を展開している。

コミュニティカフェ「茶論」：週 4 回、ボランティアで運営。

土曜朝市とラジオ体操：週 1 回土曜日に実施。

土曜ひろば：週 1 回土曜日に実施。大人と子どもが自由に来て囲碁将棋や折り紙、けん玉等で遊ぶ。

各種教室：月 1 回実施。習い事の教室（習字、大正琴、パソコン、スマホ等）が 5～6 つある。シニアの無償ボランティアが先生となって教えている。（特に女性が多い）

各種イベント：季節に合わせて、焼き芋や手芸、ミニ門松、押し花でカレンダーづくり、クリスマス、ハロウィン、バス遠足等のイベントを実施。また、年に 1 度の地域の祭り（高柳祭り）もやってきたが、現在は分離して別組織が運営を担う。

- ・ 各講座から協力金（100～200 円／人）を拠出し、児童育成積立金にプールしている。貯まった積立金は、地域の小・中学校へ図書券として届けてきた。学校は金券や現金を受け取れないことを知り、支援の方法は工夫が必要だと感じている。

■ メンバー集め

- ・ まち全体で他人の孫（＝たまご）を育てることを目指し、「たまご教室」という様々な教室を行っている。地域の高齢者が無償のボランティアで先生として教えており、それぞれの教えられる特技等に合わせて習字や大正琴など様々な教室を開講している。小学校でのプリントの問題指導と採点は、ボランティアの高齢者にとっても勉強になると感じている。
- ・ ボランティアの先生の募集は、紙で募集をしているわけではなく、知り合いの知り合いを頼みながら輪が広がっている。「こういうことがやりたい」という話から詳しい人が見つかったり、その人を中心にして人を集めたりしている。
- ・ 春や夏には遠足があり、地域の高齢者が引率をしている。小学生とおじいちゃんおばあちゃんが交流でき、双方にとってよい影響がある。
- ・ ボランティアで集まってもらうと、習字や裁縫など様々なスキルを持っている人が周りにいることを再発見した。そのようなスキルをもった人が埋もれてしまうのはとてももったいないと感じている。

体制づくり（人） —高齢者が支援者として活躍—

POINT

高齢者がそれぞれの持つスキルなどを生かして教室の先生を務めたり、子どもを集めたイベントで引率をしたりするなど活躍している。高齢者の活躍の場となるだけでなく、子どもも普段学べないことを教えてもらうことができるなど高齢者と子どもの双方により効果をもたらしている。

■ 包括との連携

- ・ カフェ「茶論」が始まってから包括との連携が始まった。カフェ「茶論」の代表者が元民生委員で地区社協のメンバーを務めるなど、以前から包括と関わりがあったことからスムーズに連携が進んだ。活動に関わる中で、必要なときには社協の担当につなぐなど、包括はつなぎ役としての役割を担っている。
- ・ カフェ「茶論」の中で時間をとってもらい、体操や介護予防の話をしたり、フレイル予防のお知らせをしたりするなど、ミニ講座の講師として一緒に動いている。活動の中では、介護保険についての相談を受けることが多いと感じている。
- ・ また、2015～2016（H27～28）年には認知症の家族相談交流会を包括本部だけでなく、カフェ「茶論」でも行った。ボランティアのスタッフにも入ってもらい、近隣の介護などで悩んでいる家族を呼んだ。また、2017～2019（H29年～R1）年には、年2回、認知症に関心がある人を集めて、カフェ「茶論」の一角で認知症カフェを行った。軽度の認知症の方もボランティアとしてカフェで活動することもできるので、代表の人たちにつないだりしている。カフェ「茶論」の周知も含めて交流会や認知症カフェをしており、カフェ「茶論」を地域資源として知ってもらいたいと思っている。
- ・ 沼南地区は広く、本部会議室まで遠い方にとって近場のカフェは立ち寄りやすい。カフェ「茶論」にはたくさんのミニ講座があるので、参加を勧めることもでき、包括にとって大きな助けとなっている。カフェ「茶論」は近隣センターの隣に位置しているので、包括職員も都度カフェに立ち寄ってはボランティアさんをねぎらったり、利用客としてお土産を買ったり、ちょっとしたお手伝いをしたりするなど、協力関係が築かれている。

体制づくり（人） —包括との連携—

POINT

包括と連携して、カフェ「茶論」の場所を使って、介護予防の活動や認知症の家族の交流会、認知症カフェを実施している。地域の人にとって立ち寄りやすく、カフェ「茶論」が地域資源として有効に活用されている。

■ 市との連携

- ・ 最近では、市と協力して手作りの「地域かるた」を作っている。柏市の文化や歴史を保全する構想があり、市から実行委員会に声掛けがあった。そこで、実行委員会から「地域かるた」を提案し、子どもから大人まで市民参加型で3年がかりで進めている。
- ・ かるたでは、町のなかで残したい歴史や文化、自然を取り上げている。小学校、中学校、高校など子どもを含めた市民からアイデアを募り、読み札と絵をマッチングさせている。50程度作る予定で、まずは見本として15のかるたを作ったところ。来年の4月には完成する予定である。
- ・ 先生はOBの人で、ボランティアでやってもらっている。当地区からは地区社協と多世代交流型コミュニティ実行委員会が参加して、市役所（4つの課）、市社協、ふるさと協議会と協力して進めている。

■コロナ禍での運営体制の維持

- ・ コロナ禍になってからボランティア集めが難しくなっている。喫茶部門は、午前 2 人・午後 2 人の体制でやってきたが、シフトが組めなくなってきた。店長や別の広報関係のスタッフが重点的に来てくれることで、なんとか回っている。
- ・ ボランティアの参加が難しい背景には、家族からの反対がある。人と関わることでの感染リスクへの心配があるなかで、給料も発生しないところに行くことへの否定的な感情がある。実行委員会からは、ボランティアに対して何度も手紙を出し、コロナ感染防止対策をしていることを伝えるなどしている。

■コロナ禍で新しい形の交流を模索

- ・ コロナ禍になり、地域のコミュニティづくりをオンラインで進めていく（リモートによる通いの場づくり）という要請を受けており、一生懸命に取り組んでいるがなかなかハードルが高い。得意な人にリーダーになってもらい、最低限のことができるように学ぶ時間を作っている。リモートへの抵抗感もあり、「会ったほうが早い」という考えもあるが、コロナ禍ではリモートも進めていく必要があると考えており、理解を促している。高齢者もオンラインで色々なイベントに参加できるようになって、元気を出してもらいたい。
- ・ リモートでスムーズに参加できる人を増やし、リモートでコミュニティづくりをやっている地区だということで有名になれるよう、一生懸命取り組んでいる。

活動を広めるために —コロナ禍で新たな形の模索—

POINT

コロナ禍でこれまで通りの活動が難しくなっていることから、オンラインでのコミュニティづくり（リモートによる通いの場づくり）を進めるため、勉強会等に取り組んでいる。

3. 参加者や家族、近隣の人々への影響や効果など—包括の視点から—

- ・ 子どもたちの見守りを目標に掲げられているが、子どもたちが少なくなり、大事に育てようということで親御さんも悩まれている。子育て世代も高齢者と交流する機会がなく家にこもっていることもあると思うので、親御さんも支援してもらえる場になれば、活躍の場を求めている高齢者にもつながっていく。高齢者にとって、活動の場で役割を担うことで元気になるという側面があると思う。

4. 今後に向けて

(1) 今後の展望

- ・ コロナ禍の取組として、オンラインによるコミュニティづくり（リモートによる通いの場づくり）を進めるため、リモートでスムーズに参加できる人を増やしていきたい。柏市で、リモートでコミュニティづくりをやっている地区だということでも有名になれるようになりたいと考えている。
- ・ また、コロナ禍で部屋の中で飲食するのが難しい状況であることから、外にテーブルやパラソルを置いてヨーロッパのようなオープンカフェをしたいと考えておりこの春から始める予定である。これをきっかけに、お客さんが増えるといいなと思っている。

(2) 自治体・社協・包括等に期待すること

- ・今は社協の体制整備事業のグループとの関わりが多く、アドバイスや年間 24 万円の助成を支援してもらっている。何もやってくれないと思ったことは一切なくともありがたいと思っている。
- ・前述のように、目下オンラインでのコミュニティづくり（通いの場づくり）が課題となっているので、この部分に対する支援を期待している。ひとりでも多くリモートでスムーズに参加できる人を増やして高齢者の元気づくりをしたいと考えており、オンラインでのコミュニティづくりに取り組む地区として名が知られるようになることを目指している。

(3) 包括から団体に期待すること

- ・既に多くのことに取り組んでいるので、今後もぜひ維持してもらいたいと考えている。活動をしている方も高齢になり大変だという声も聞こえてくるので、引き続き疲弊せずに続けてほしいと思っている。
- ・また虚弱になっている方もつないでいるので、当事者も家族も気軽に話して元気をもらえる場として地域の緩やかなプレレイルの方も含めた見守りの核となってほしいと考えている。

活動団体の情報	多世代交流型コミュニティ実行委員会「コミュニティカフェ『茶論』」 千葉県柏市高柳 1652-1 TEL 04-7103-8948 （担当：輿石邦男（こしいしくにお）） WEB サイト https://ta8mago.web.fc2.com/index.html 視察の受け入れ：要相談
---------	---